ネズミの楽園

R4.5.31_Tuesday_【心を育む生徒指導通信No2：通算45号】

作成者・教諭　花園修兵

新年度が始まり、2か月が過ぎようとしています。これまでにも多くの行事が実施されてきましたが、先日、1年生を対象に薬物乱用防止教室が実施されました。薬物依存はその人の人生だけでなく、家族や周りも巻き込む恐ろしいものです。そこで、今回のテーマは「**ネズミの楽園**」です。日本講演新聞に掲載された国立精神・神経医療研究センターの松本俊彦さんのお話から考えてみたいと思います。

今から40年以上前にネズミの楽園と呼ばれる実験が行われました。
まず、オス・メス16匹ずつのネズミを用意し、二つのグループに分けます。
Ａグループは、金属の檻の中に一匹ずつ隔離します。餌や水は決められた時間に決められた量しか与えません。Ｂグループは16匹まとめて1か所に入れます。広々とした場所の床には、おがくずが敷いてあって暖かく、餌も水も好きな時に好きなだけ摂取できます。この二つのグループに二つの飲み物を用意します。一つは普通の水、もう一つは「**モルヒネ入りの水**」です。モルヒネは依存性薬物で、その依存性の強さは覚醒剤よりもはるかに上です。

この二つの水を与えながら、ネズミたちを観察すると・・・57日後
どちらのグループのネズミがモルヒネ水を多く飲んだと思いますか・・・？
結果は、Ａグループの方が圧倒的にモルヒネ水を好み、16匹中、16匹が普通の水よりもモルヒネ水を強く好んだのです。一方、ネズミの楽園にいるＢグループのネズミたちは、16匹中、15匹が普通の水を好みました。彼らは最初、両方の飲み物を試すように飲んでいました。しかし、途中からモルヒネ水のほうには一切口をつけなくなり、仲間たちとじゃれ合うことを楽しんでいました。おそらくこのＢグループの15匹のネズミたちにとって、モルヒネのもたらす酩酊感や多幸感よりも、仲間とのコミュニケーションのほうが遥かに楽しく魅力的だったのでしょう。
このことから、仲間との繋がりから孤立して、自分の裁量の効かない不自由な、あるいは息苦しい環境や状況に置かれている人のほうが依存症になりやすい可能性があることを意味します。「負の強化」といって痛みや悩み、苦しみを一時的に消すための行動を繰り返すうちに依存症になるのです。

この話には続きがあります。
Ａグループの檻の中で57日間モルヒネ漬けにされてすっかり依存症になってしまったグループから1匹だけ、Ｂグループへ移しました。　皆さんはどうなったと思いますか・・・？
最初、新しい場所に移されたネズミは、グループに入れてもらうことができず、一人寂しく群れから離れ、静かにモルヒネ水を吸い続けていました。でもそのうち、Ｂグループの連中がこの独りぼっちのネズミに関心を持ち始め、近寄っていって「**一緒に遊ばない？**」と誘うようになったのです。
するとその独りぼっちのネズミは、彼らと一緒に群れ始めます。そして、やがてＢグループのレギュラーメンバーへと昇格していきました。それ以後そのネズミは、それまでずっと飲み続けていたモルヒネ水を飲まなくなり、周りのネズミの真似をして普通の水を飲むようになりました。モルヒネ水を断ったネズミにはものすごい離脱症状が出ました。2日間、けいれん発作に苦しみました。しかし、その状態を耐え抜いたネズミはすっかり解毒され、モルヒネ水の依存状態を抜け出していったのです。

皆さんどうでしたか？
ネズミの実験のため、そのまま人間に当てはめるのはいささか乱暴ではありますが、考えさせられるものがあります。やはり、人は1人では生きてはゆけない。社会というつながりの中で生かされているのだと。
大事なのは「**当事者を孤立させない**」ということと、「**当事者とつながりをもつ**」ということです。
そういう地域社会であったり、学校をみんなで考えながら、自分たちでつくっていきましょう。
皆さんは一人ではありません。同じ地域、同じ学校、同じ学年、クラス、部活動の仲間がいるはずです。家族がいます。先生がいます。今、隣にいる人に優しくしましょう。隣にいる人同士が思いやりから互いに思い合って、よりよい学校生活を自分たちで創造できる穴高生を目指していきましょう！